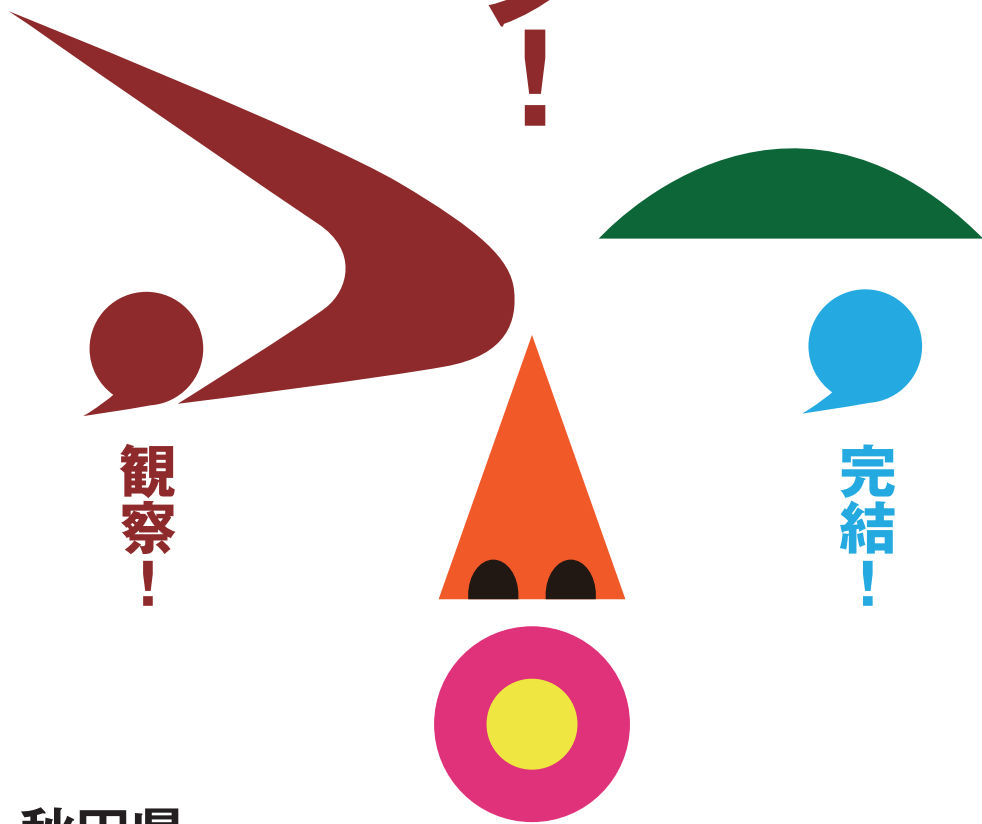


国語
算数
理科
デザイン!



秋田県
2025
Final Archive Book



令和7年度 若者と地域をつなぐプロジェクト事業

主催：秋田県 あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ
企画・トータルディレクション：澁谷デザイン事務所



そんな『デザイン』の授業があったらいいのになあ……

ただただ観察する、デザインの旅

日常にあふれている、日々の隅々を「観察」することをきっかけに、地域を意識し、地域とつながろうとする感情を育み、そしてその先に何らかの行動・アクションを見出そうと、もがき続けた半年間のデザインプログラム「**国語・算数・理科・デザイン!**」。

県内の高校生・大学生で構成された合計8チームが、何気ない日常を観察し、半年間「**地域とつながるとは、どういうことだろうか?**」と悩み続けました。そしてその先に自分自身の本当の感情が動き出すのをじっと待ち、耐え続けた「葛藤の過程」を正直に愛で合い、大切にしてきました。身近にある何気ないモノや風景、はたまたヒトなどの観察トレーニングからはじまった半年間のデザインの旅。今まで感じたことのないような、答えのない手探りな初めての旅にチャレンジしてくれた高校生・

大学生たちの中に湧き出てきた、嘘偽りのない半年間の『**本音(過程)**』。今回、それを地域の方々にもしっかりと見届け感じていただきたいと思いい、最終成果をまとめたのがこの一冊です。

どこかで見たことのある、いかにも正しいような答えに頼ることなく、悩み苦しんだ過程をそのまま見せ、曝け出すということは、とても怖くて勇気のいることだと思います。しかし、その不安と葛藤にめぐることなく、「**地域とつながる実感**」を模索し、泥臭く掘み取ろうとした軌跡こそが、参加者全員の成長の証であり、この事業の成果だと信じています。

そんな全8チーム、そして運営チームのMOD & CODが必死に駆け抜けた半年間の軌跡を、たっぷり、そのまま地域の方々に感じていただけたら幸いです。

※1 チームMOD：プロジェクト全体を運営するチーム名。ちなみに「MOD」は「もつとお尻を出す」の略

※2 チームCOD：このプロジェクトに参加していた卒業生(高校生&大学生等)で構成された

MODの運営を支えてくれる、心強いパワフルな若手チーム。ちなみに「COD」は「ちょっとお尻を出す」の略



ラジオ☆

ザ☆昼飯キャプテンズ

キャプテンズ！ ON AIR！！

本荘高校2年生の安田優月さんと佐々木空澄くんは、それぞれ山岳部と軟式野球部の部長。毎日一緒にお弁当を食べる仲だった。部活が成立しないほどの部員不足という地方高校のリアルを実感しながら、それでも部員を引き抜き合わせる必要はないという部長の立場……。その状況が、ユニークなお互いの理解関係を育んでいった。そんな彼らのチーム名は、ズバリ『ザ☆昼飯キャプテンズ』。

第1回WSで大森山動物園を訪れた際、佐々木くんはクマの、ぐるぐる回る行動を観察し、そういえば以前、オーブンキャンパスで「ストレスによる常同行動」という言葉を聞いたことがあったことを思い出す。後日「あれは本当にストレスだったのか？」と気になった佐々木くんは、ツキノワグマを飼育している全国の施設を調べ、飼育方法やストレスについて問い合わせた。すると、京都市動物園、北海道登別くま牧場、北秋田市くまくま園、仙台市八木山動物公園フジサキの杜、秋田市大森山動物園から返事が届き、飼育情報を聞き出すことに成功。

さらに修学旅行では単独行動を志願し、クマ見物のためだけに京都市動物園へ足を運ぶ。気付けば、半年の間に大森山動物園へは4度も通い詰めた。

一方の安田くんは、そんな佐々木くんの情熱に付き合いながら、昨年度の参加者が観察した「緑屋ビルのイノテノア文字」や「神社のベンチに書かれたスナックの店名」「手洗いステッカーに描かれたパンダの絵(アライグマではなく)」など、気になったものを観察し続け、その観察量は、今年度の参加者の中でも群を抜いていた。しかし「動物園」や「クマのストレス行動」の探究に邁進する佐々木くんを横目に、自分はいったい何に興味があるのだろうか……。と、一貫性のない自分の観察に悩むようになる。

そんな折、オンラインWSでチーム『浪漫知視図夢』(p.30)の梁田くんが「ロマン」という言葉を口にした。それは、戦隊モノが好きだった安田くんにとって、気になる言葉だった。その後、梁田くんからDMが届いたことをきっかけに、2人は連絡を取り合うようになる。



↑ABSラジオのスタジオにて「ラジオデ、体操～国語・算数・理科・デザイン!～」の番組に生で出演してくれた佐々木さんと安田くん(左の奥2人)



ABSラジオのスタジオで、大ファンだった大森山動物園の名誉園長・小松守さんにたまたま偶然会えて大喜びの佐々木くん→



自分の“今”に正直にること

←今年度の本プロジェクトで初めて開催された集中WSにも積極的に参加してくれた2人

そして、その後『ザ☆昼飯キャプテンズ』が企画した本荘散策にも梁田くんを誘ったことで、2人の「ロマン」は次第に「特撮の世界」へと発展し、安田くんはストーリー作りを担当することになった。

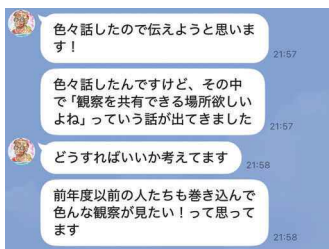
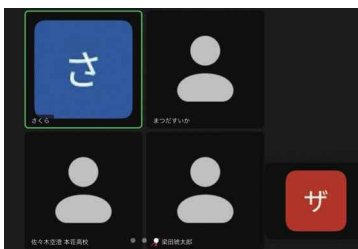
この頃から安田くんは、これまで「多過ぎて処理しきれない」と思っていた自分の中の初期衝動に対して、「いや、全部やろう!」と思うようになっていった。オンラインWSで「面白い!」と感じていた湯沢翔北高校のチーム『具がいつぱいのおにぎり』(P40)に連絡を取り、特撮への協力を依頼。さらに、怪人役には元々このプロジェクトへの参加の誘いを躊躇っていた高校の友人・佐藤伶君に声を掛けた。まさに安田くんにとって、コンプレックスがエネルギーへとひっくり返っていくような時間だった。

最終報告会の1週間前には、チーム『浪漫知視図夢』とともに大森山動物園を訪問し、特撮の買い出しも済ませた。3月5日の特撮撮影日には『ザ☆昼飯キャプテンズ』+佐藤伶君で参戦し、安田くんは動画編集まで担当した。

そして迎えた最終報告会。トップバッターとしての緊張のなか、持参したスピーカーから唐突に流れてきたのは、「ザ☆昼飯キャプテンズ」の、ラジオ☆キャプテンズ!という掛け声だった。意表を突かれ、ざわつく会場。そこへ安田くんの絶妙なMCが切り込む。「さあ、始めました! ラジオ☆キャプテンズ! 本日のテーマは『ソラト(空澄)』! 動物園の流儀です!」と、彼らの発表はなんとラジオ形式。動物園にまつわるテーマを即興で選び、安田くんが佐々木くんの動物園に対する偏愛を聞き出していくというスタイルだった。「閉園間際までいるべし!」「動物にも推しを!」とにかく歩く!」などなど。会場の聞き手に寄り添う言葉で2人の会話が展開されていく。実は、以前からラジオを聴くのが趣味だった安田くんの提案で、3月6日、2人はABSラジオ『国語・算数・理科・デザイン!』の生放送に参加し、「ラジオ」というメディアの現場を体感していたのだ。「ON AIR」の文字、手作りのめくり、大森山動物園のチラシ、特撮の

衣装、さらに初回の集中WSで参加者全員に配られたクマの置き物まで持参し、2人の手荷物はパンパン。彼らは、半間の観察の過程すべてを「ラジオブース」という形に凝縮して表現したのだった。クマ(動物園)にまつく邁進した佐々木くん。そして、とことん迷走した安田君。2人に共通していたのは、「自分の今、に正直にしている」という姿勢だったように思う。それは、人とつながる姿勢の根っこそのものではないだろうか。

最終報告会の翌日、安田くんから「みんなの話をもっとゆっくり聞きたいです。昨年度の卒業生が開催していた『だべり会』的なことがしたいです!」というメッセージが届いた。当たり前のことではあるが、彼らの「今」は、この事業が終わった後も続いていく。この半年間、そこに正直に行動し続けてきた彼らなら、きっとこれからも誰とでもつながっていきけるのだろう。そう確信しつつ、これからの『ザ☆昼飯キャプテンズ』が紡いでいくラジオ、そしてプロジェクトのデザインにも期待せずにいられない。



最終報告会の翌日、「今年度の活動のふりかえりだったり、今後の展望などを先輩・後輩・学生・大人の垣根を超えてだべるオンライン打ち上げ(だべり会)をみんなでやりましょう」と安田くんが声掛けして実現した最初の「だべり会」の時の様子。最初の「だべり会」には、『具がいつぱいのおにぎり』の2人と『浪漫知視図夢』の梁田くんなどが参加。『だべり会』で色々話したなかで、「今後は観察を共有できる場所が欲しいね」という話題などで盛り上がったとのこと!

ON AIR



↑ザ☆昼飯キャプテンズが、最終報告会以降に新たに立ち上げたラジオ番組をこちらから聴くことができます!引き続き、彼らの観察にぞうご期待。

これから先の 新しい尾去沢鉦山を 一緒に考えて いきましょよう

鹿角高校

秋田県の県北部にある鹿角高校からのプロジェクトに参加してくれるのは初めてのことだったと思う。尾去沢出身の高田蘭妃さんと、毛馬内出身の安保愛海さんの2人は普段からほのほのマイペース。どちらかというと物静かで冷静な安保さんと、ぐいっと引張るタイプの高田さんはとてもいいバランスに感じた。そんな2人が本プロジェクトを進めていくなかで、当初から気になっていたのが、鹿角市の名所でもある「尾去沢鉦山」という史跡だった。今回、2人が改めて地元の名所に引きつけられたのは、鉦山史跡に設置された外国人風のマネキンが気になるといふ何気ない興味がきっかけにあったが、特に高田さんにとっては、祖父が地元の鉦山で働いていたことや、中学校の取り組みでボランティアガイドをしていたことにも深い興味の発端があった。奈良時代に初めて確認されたとも言われる尾去沢鉦山だが、昭和53年にその役目を終えて閉山。その後は観光坑道、史跡として歴史を学ぶ場となってきた歴史があるが、それも2025年度を

もって、いよいよ一般公開を終了するという節目の年となっていた（今後は完全予約制の社会科見学施設となる予定）。

2人はまず手始めに、他のチームやスタッフを尾去沢鉦山を案内する会を企画することにした。10月26日、スタッフを含めて17名が参加。まもなく一般公開が終了するということもあってか、冬が近い尾去沢鉦山の駐車場には、いつもにも増して車が停まっていた。坑内は約13℃で、予想していたよりも気温は高めだった。高田さんによる案内で見学が進み、時折立ち止まっては解説が行われる。彼女の手元にはマニュアルのようなものがあり、それを機械的に一語一句読み進める形ではあったが、それを読み終えると本人の生の感想がポロッと漏れ出る瞬間がある。「そうなんです。実は銅がいっぱいなんです」「いや〜このマネキン面白くないですか？」そのギャップも相まって、彼女らしい本音の数々が、実感を伴って面白く感じられる。こうして約1時間、我々はたつぷりと尾去沢鉦山探索を堪能させてもらい、名残惜しい気持

地元の名所を自分の気持ちで追いかける



高田蘭妃さん(左)、安保愛海さん(右)



高田さん&安保さんが尾去沢鉦山を案内してくれたWS

ちを感じつつ、晩秋の鹿角を後にした。

それからしばらく時間が経ったある日、その後の2人の活動状況を聞いてみると、引き続き尾去沢鉦山への興味を掘り下げているとのこと。そして高校の探究活動も利用しながら鉦山の知識を得られるツール作りも検討しているんだとか。そんな彼女たちは、ある個人が制作していると思われるWebサイトが気になるものだった。どうやらそのサイトとは、ドローンを使って尾去沢鉦山の色々な施設を探検し、画像を多く掲載し紹介しているものだった。それを閲覧してからというものの、自分たちの目で未公開の施設を見てみたいという願望がムクムクと湧き出てきた2人。後日、ドローンもしくは実際に見学するための許可を取るべく施設に問い合わせしてみたものの、残念ながらその場で断られてしまったとのこと……。どうやらそのサイトは許可を取って撮影されたものではなかったようで、安全面も含めていかなる場合でも許可はしないのだとか。ここまできて2人の希望が頓挫してしまったのである。



これまでの流れをメンタリング担当の
 柚木（秋田公立美術大学）とオンライン
 ミーティングで共有し、「2人は今後ど
 うしたいのか？」を確認する。その上で
 「なぜ見たいのか？」につながる熱い気
 持ちを取りまとめてみることにした。こ
 うして、一度は尾去沢鉱山の方に断られ、
 閉ざされてしまった扉をどうにかこじ開
 けられないかの検討が始まったのだ。そ
 うして1週間後、彼女たちから届いたの
 は以下の文言だった。

- 写真や資料では分からない「大きさ・
 空気感・現場性」を体感したい
- 産業遺産の保存や活用について自分た
 ちなりに考察したい
- 鉱山で実際に使われていた設備の構造
 や役割を具体的に知りたい
- その経験を自分達の財産にしたい

こうした気持ちを、熱い文章とともに
 鹿角市産業活力課の担当者へ一通のメー
 ルで送ってみることにした。もしかする
 と、行政からのルートが存在するかもし

地元市役所の方々との、地道なやりとりの価値



2人の相談に親身に乗ってくださった鹿角市産業活力課の方々

れない。そんな業にもすがる思いだった。
 数日後、市役所の担当者から返信が
 あった。市役所でも色々と調べてみた
 ところ、鉱山のエリアによって管理する管
 轄が分かれているようで、市役所からも
 アプローチを図ってくれるようだ。そし
 て、このように地元の遺産に興味を持っ
 ている高校生がいるということに驚いて
 いるとのことだった。その後、結果的に
 は残念ながら見学の許可は降りなかった
 のだが、市役所側も「是非2人の見学に
 立ち会いたい」など、親身に掛け合っ
 てくれたことが後に分かった。

こうして鉱山の見学には辿り着けな
 かったが、色々と相談に乗ってくださっ
 た鹿角市産業活力課の方々に、改めて鉱
 山のことをお聞きする機会を設けていた
 だけのことになった。そこに至るまでは、
 普段の生活では感じることはない、行政
 の方々との地道で面倒に感じられるメー
 ルのやりとり・経験などがあったことも、
 彼女たちにとっての大きな学びになっ
 たのではなかと感じている。

高田さんと安保さんがこれまでの経緯

・webサイトを作るにあたり、
kazuno + mine + landscape
 鹿角 鉱山 風景
 を組み合わせ
K.Minescape
 というサイト名でサイトを作った



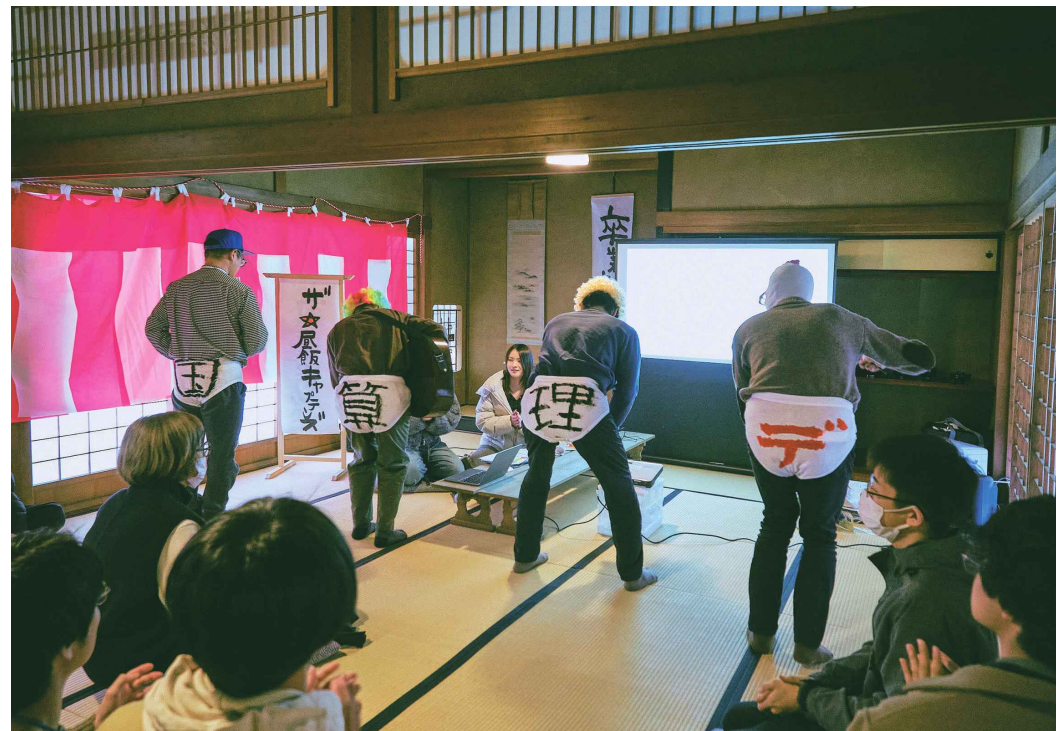
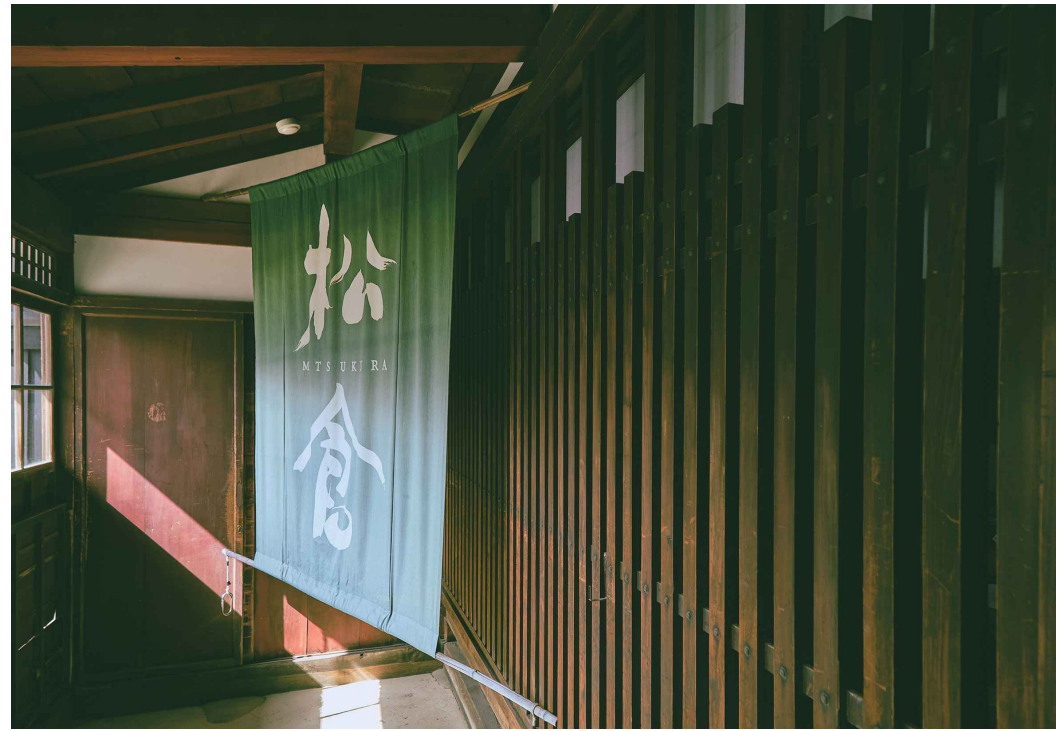
今後は秋田の地元企業と組んで、Webサイトの公開を目指す！

【発表資料提供：鹿角高校チーム】

やこの活動のことなどを話し、また市役
 所の方々にはより具体的な尾去沢鉱山の
 歴史や資料を紹介してもらった。鉱山の
 繁栄はそのまま鹿角市の潤いでもあり、
 また事故や暗い影も間違いなくあったこ
 となどなど……、色々な面があつてなお、
 尾去沢鉱山は鹿角の大事な史跡であり、
 地域を創ってきた偉大な先人たちの証だ
 ということがよく理解できた2人。

最後に、市役所の方々から「これから
 また先の新しい尾去沢鉱山と一緒に考え
 ていきましょう」というメッセージをい
 ただけたのが印象的で、まさにこの2人
 のような地元の学生たちの存在・力が必
 要なのだろうと甚く感じた。

「かわいい子には旅をさせよ」とも言
 うが、これからの時代、地味でありなが
 らも、自分のルーツとなる足元を深く掘
 り下げ続ける人材もきつと必要はず。
 地方の活性化が日本の各所で盛んに謳わ
 れるなか、ここ秋田で、そんな人材に光
 の当たる未来があつてほしい。



ズルい ZOD お尻を出す

佐々木廉くん(上)、高橋佑希くん(下)

先輩です



後輩です



秋田公立美術大学の4年生・佐々木廉くんは、昨年度もチーム『CMP』として参加してくれた一人。昨年の最終成果報告会での発表の無念さ・不甲斐なさを晴らすべく(昨年度の様子は2024年度版アーカイブブックを参照)、今年も本プロジェクトに果敢にも挑んでくれた佐々木くんが、今年のチームメイトとして引き連れてきたのが、大学の後輩である1年生の高橋佑希くんだった。2人の関係は、高橋くんが大学に入学した当初、講義で使用する教科書を購入し忘れ、急いで教科書を書い求めて行った先でバイトしていたのが佐々木くんだったことに始まる。その後大学のバレーサークルでバツリ再会したことから、佐々木先輩と後輩の高橋くんという関係がぼんやりと始まっていく。昨年の無念を晴らすべく今年の新しいチームのメンバーを探していた佐々木くんは、そんなタイミングも手伝って、1年生の高橋くんと一緒に活動をしないかと声掛け。そうして、シン・秋田公立美術大学チーム(敢えて、「シン」と呼んでみる!)は動き出す。



今回の調査結果



[発表資料&写真提供:ZOD]

先輩と後輩という地域のバランス

そんな彼らが一番先に観察の興味を向け、選んだテーマは「水・湧水」だった。まだ2人の関係性が深まっているとは思えないなかで、突如浮上したその意外なテーマ設定に、本プロジェクトのアドバイザーである溢谷(溢谷デザイン事務所)は、不自然な唐突さを感じた。残暑の厳しいなか、早朝5時に起きて湯沢市や羽後町、そして湧水の町として知られる美郷町の湧水巡りをしてきましたと意気込む2人に、観察のテーマとして「水・湧水」を選んだ理由を率直に尋ねると……、「あ、ええと、僕の卒業研究のテーマが『水』でして……、ヒバの香りのする水の開発はできないかなと……、そんなこともあって……、はい……」と、なんとも歯切れの悪い返答が佐々木くんから返ってきた。そして、その横でどこか曇った表情を見せる高橋くん。先輩、後輩という関係性とは酷なもので、高橋くんは自分の興味・本音などはそっちのけで、佐々木くんの卒業研究に巻き込まれただけなのではないか……と感じずにはいられなかった。昨年の最終成果報告会以降、

佐々木くんとは事あることに話す（相談を受ける）機会の多かった澁谷は、佐々木くん特有のズル賢さを感じ、率直にその場で「佐々木くんは、ズルいね（笑汗）」と彼に伝えた。そして一方で、まだ大学1年生である高橋くんが、率直に今興味があること、本音についても尋ねてみた。すると「僕は最近はどうんを茹でる時にお酒を入れて茹でるとコシが出るという噂を聞いて試してみたいと思ってます。あとは……、お腹の満足度合いで食べ物の味は変わってくるのではないかとか気になったり……」と、どこか佐々木先輩の顔を気にしながらも話してくれる高橋くん。彼なりに自分の中の興味や本音を漏らしてくれる姿が印象的であり、その後の先輩・後輩のやり取りがどう展開していくのか、とにかく静かに見守ってみることにした。

ということ、そんなバランスで始まった（始まってしまった）シン・秋田公立美術大学チームのその後の活動が、足踏み状態になっていくだろうことは想定内だった。「2人とも忙しいから、な

たかもしれない高橋くんが「湧水の調査」と題し、自分の気持ちと言葉で、会場の人たちの心に届く発表などできるはずがなかった。そしてとどめは、そこに取って付けたように、ここ数日でかき集めてきた「足跡（一時停止マーク）の調査」の発表をする佐々木くん。最終的に足型を地域の方から借りてきた行動力は評価したいと思うが、これまでの秋田公立美術大学チーム「ZOD」としての「活動の足跡」は、皮肉にもすっぽり抜け落ちていた。その横で一人取り残されたように座る高橋くんの姿は今も忘れられない。必ずしも先輩と後輩として同じことを一緒にやらなくても、一緒に進む在り方やバランス、到達点があったのではないかと思う。実際、今年度参加してくれたチームの中にも、チームでありながらその個人個人が自由に自分を吐き出すことで成り立っている印象のチームは多くあった。ズル賢く表面的に地域とつながるのではなく、2年目の挑戦だからこそ、もっと粘っこく地域に寄り添う力を本プロジェクトで発揮してほしい。



新屋・茨島

【発表資料&写真提供：ZOD】



集中WS | 尾去沢鉱山（鹿角市）にて



集中WS | 澁谷デザイン事務所（美郷町）にて

かなか会って話せない……」という Teppan の逃げ文句のオンパレード。しかし、そんななかで開催されたオンラインでの中間ワークショップの場で高橋くんは、「鍾乳洞があるところの名水が美味しいみたいな噂を聞いて、鍾乳洞が気になる。今の秋田の問題になっている熊のことをきっかけに、自動ドアって意外と重いんだなって思った。美大がある新屋地域でお店が続いている個人経営の飲食店が気になる」と拙い言葉ではあったが、ぼつりぼつりと自分の中の気持ちを話してくれた。

そうして、いよいよ迎えた最終報告会の日。これまでの彼らの活動状況を見て、想像はついてはいたが、シン・秋田公立美術大学チームの発表は、昨年の発表にも増して散々なものだった。発表冒頭に「この半年間の活動では、『全然お尻を出せなかった』ので、チーム名を『ZOD』にしました（笑）」などと、ヘラヘラ語り始める佐々木くん。率直に書くが、その冒頭の後、佐々木くんの個人的な卒業研究の都合・ついでに振り回されてしまっ

この2年間の活動ぶりを通じて、そんな自分の中のズルさを一番理解しているのは、佐々木先輩、彼自身ではないかと思う。申し訳ないが、「ZOD」は「ズルいお尻だ」の「Z」だろう。今後は、「絶対にお尻を出す！」の「Z」の心意気で未来に突き進んでほしいと期待している。昨年度に続いて厳しい物言いでごめんなさいね、期待してますよ、佐々木パイセン！そして、高橋くん！



には実際に商品を購入する必要があり、その費用をこのプロジェクトの活動費として使うことはできませんか？」と。そして、この方向性は学校の先生にも相談した上で出てきた提案でもあったということ。しかしその一方で、2人自身の本当の関心は別のところにあった。木村さんは音楽、特にギターが好きで、楽器に関わることをやってみたいという気持ちがあったが、「個人的にやってみたいのは楽器の方だけれど、本当に結果が出るかは分からない」という不安もあり、先生が示してくれる「地域プロジェクトらしいアイデア」の方に気持ちが傾いている部分もあったと正直に語ってくれた。

そこで運営チーム(MOD)から2人に伝えたのは、このプロジェクトでは「いわゆる学校での評価とは関係のないことに挑戦してほしい」ということだった。学校の授業や活動の中では、どうしても評価や成果が求められる。しかし、本プロジェクトが重要視するプログラムでは、そうした評価から少し離れて、自分が本当にやってみたいと思うことに向き

個人的にやりたいことと、学校で評価されることの狭間で



集中WSの最中、
黙々とギターに触り続ける木村さん

澁谷デザイン事務所(美郷町)にて



地域活性化 ゆずき

湯沢翔北高校
一年生チーム

根岸ゆずきさん(左)、木村莉呼さん(右)

湯沢翔北高校1年生の木村莉呼さんと根岸ゆずきさんは、中学生の頃から友人。互いの性格や関心をよく理解している関係で、先生からの紹介をきっかけに本プロジェクトに応募してくれた。審査の場でも、2人の間に自然な信頼関係があることが印象的で、その関係性がチームとしての強みになるのではないかと、う期待が寄せられていた。

活動が始まると、最初の集中WSでは、どのようなテーマで活動していくのか悩める時間が続き、2人の中でなかなか方向性が定まらず試行錯誤が続いた。そうしたなかで、ある時2人から一つの相談があった。「本荘高校と湯沢翔北高校では、トンネル開通をきっかけに地域の飲食店を紹介する『ランチパスポート』を作ることを検討しているという話があり、当初は割引券をつけた冊子を作る構想だったそうです。しかし、予算の都合から割引券の仕組みを実現することが難しく、フリーペーパーとして飲食店を紹介する形に変更する可能性が出てきました。その際、料理や商品を撮影するため

合ってみてほしいと考えている。「学校で評価されたら、もしかしたら0点かもしれない。でも、世の中の人から見たら200点になるようなことがあるかもしれない。そんなことを、このプロジェクトではやってみてほしい」本プロジェクトのアドバイザーの一人である柚木（秋田公立美術大学）もそんな言葉を彼女たちに投げ掛けてくれた。そして、授業の枠を少し飛び出して、自分の関心に正直に取り組む時間をつくってみないかと2人に提案。

そうして、改めて自分たちの興味を見つめ直したとき、木村さんの中にあつた正直な気持ちは「音楽」への関心であり、そこで彼女は秋田杉を使ってギターのピックを作ることはできないか……と思いついた。ホームセンターで秋田杉の板を購入し、お父さんの協力も得ながら、自分の手でピックを削り出し、素材の手触りを確かめながら形を整え、実際に弾いてみて音の違いを感じる。そうした試行錯誤の時間は、ものづくりの楽しさを実感する時間でもあつた。さらに、木村

1 音楽が好き 2 秋田杉が有名



〔発表資料&写真提供：湯沢翔北高校一年生チーム〕

さんの親戚に音楽に関わる人がいたことから、完成したピックを実際に使って演奏してもらう機会も生まれたことも、大事な関係性の創出であり、地域とのつながりの種でもあつたと言える。

そして、その様子を見ていた根岸さんも、次第に「ものづくり」そのものに興味を持つようになり、木材を加工し、道具が形になっていく過程に面白さを感じ、2人で一緒にピック作りに取り組むことに楽しさを覚えていく。最終報告会の場では、元々興味の種は木村さんが持っていたものだったが、結果的には根岸さんの方が、木村さんの興味を超える勢いでものづくりに没頭していく姿（ものづくりの過程を熱く語り発表してくれる姿）が印象的だった。

最終報告会の場で、「なぜ秋田杉という地域の素材を選んだのだろう？」という運営チーム（MOD）からの問いかけに対して、「地域活性化っぽいものが良いのかな、地域に関係するものにした方が良いのではないかという思いが、自分のどこかにあつたのかもしれない」

と正直に話してくれた2人。「地域活性化」という言葉や、地域とのつながりを意識する姿勢はもちろん大切なものだが、このプログラムでは、まず自分の関心から始まることも同じくらい大切にしている。音楽とものづくりという身近な関心から始まった今回の活動は、2人が自分の興味に向き合い、それを周囲の人と共有する時間になっていったという点で間違いない成果だ。地域との関わり方一つではない。自分の好きなことから一歩を踏み出すことが、自分も想像しなかった思いがけないカタチで地域とつながっていくことがある。今回の取り組みは、そんな可能性を感じさせる、小さくも希望に満ちた探究の時間だった。この先、いつの日か、彼女たちのオリジナルの曲が、今回作ったオリジナルのピックで奏でられる日を楽しみにしている。



♡お気に入り



木村



根岸



さまざまな加工法で試作の制作を行った2人





竹立飯子

卒業おめでとう

独にかほを したりかほを 占めたい

国際教養大学

国際教養大学（以下A・U）に通う齋藤千愛莉さんと佐藤佳望さんは、お互い大学で知り合ったのだが、実は秋田県にかほ市出身という共通点がある。2人は大学寮で暮らすなかで仲良くなり、地元を想いを馳せることも少なくなかったと話す。寮暮らしとはいえ同じ秋田県なので、頻繁に実家に帰れるのか……というところ、授業や試験、サークルにアルバイトと多忙な生活がゆえになかなか思うようにはいかない日々を送っていた（大学生は忙しいのだ）。ちなみに齋藤さんは仁賀保、佐藤さんは象潟と若干の地域差はあるものの、大自然を身近に感じながら育った共通点はやはり大きな絆となっているのだろう。「私たちの大好きなにかほ」のために何かしたい」という2人のなかには、まだぼんやりだが活動の輪郭が浮かんできているようだった。

しかし、多忙を極める2人に対し、日々はあつという間に過ぎていく。なんとか動き出そうにも寮（秋田市雄和）から出かけられる足がない。そんなモヤモヤが湧き出てきた12月半ばに、「とりあえず

スを送ることにした。そうして、後日2月20日、その日は都合が良かった齋藤さんと待ち合わせ、柚木と2人ではかほへ。特に行き先は決めずに、道中の話から気になるところを次々とドリフトしていく観察の旅へ臨んだ。

まずは仁賀保駅前の「お菓子のまつなが」へ。齋藤さんが小さい頃からよく知っている洋菓子店だそうで、「フェライト棒や」「あがりこ大王」など、にかほらしいネーミングのお菓子が並ぶ。その後、幼少期に自転車漕いで通ったという駄菓子屋を目指す。残念ながら閉店してしまったようだったが、小学校時代の話に花が咲き、同時に中学校進学で地元を離れてしまったことを少し残念がっているのが印象的だった。いちじく農家やコーヒーイベントなど、色々な話をしながら美しい鳥海山に導かれるように車を走らせていると、突然「あっ！ ここだー！」と何かに気がついた齋藤さん。実は以前、佐藤さんと齋藤さんから2人の間で話題に挙がっていた「大きなクリスマスツリー」の木の場所だった。車屋さんの敷地にあ

動く」という名目で2人が暮らすキャンパスを案内してもらうことにした。本プロジェクトのアドバイザーの一人である柚木（秋田公立美術大学）+小6になる柚木の息子を、中嶋記念図書館から最後は学生寮まで案内してくれ、2人の生活の一部を感じることでできたのはとても新鮮な時間だった。その後、構内のカフェテリアで今後の方針を共有しこの日は解散。さあいよいよ行動開始！ ……とは、なかなか上手くはいかないのが、本プロジェクトの難関であり、醍醐味だ。そして、それからしばらくが経ち、2人の地元へ行く予定の3日前のこと。佐藤さんから「大学の活動に追われていて、このプロジェクトにじっくり向き合えなさそう……」と一本の連絡があった。彼女なりに運営チームに迷惑をかけたくなかったと誠実に考えた上での連絡だったのだが、何事も辞めてしまうのは簡単で、続ける方が何倍も苦しいかもしれない。「せっかく参加した縁。今の状況のなかで、逆に自分にどんなことができるか考えてみようか」とオンラインでアドバイ

なふうに話した方が正しいんだろうな」と思いながら喋っていた言葉が多かったという齋藤さん。もちろん、人口問題やエネルギー問題など、秋田にはたくさん課題があることもよく理解しているけれども、「これが私の本音です！」と笑いながら話してくれたその言葉はとても美しいものだった。

そして、最終地点である元滝伏流水。今、まさに目の前で清流が湧き出てくる様子を見ながら、道中に駅前で購入していたシュークリームをほおばり、じゃあ帰ろうかと帰途へついた。

その後、齋藤さんと佐藤さんらは2人で話し合い、「やっぱりにかほが大好き！」という言葉を改めて共有。最終報告会では、「にかほの魅力を、本当は誰にも教えたくない！」と言い切った2人。そして、「観光地として人が居ないという状況も、改めて価値なんだよなと感じた」とも話してくれた。佐藤さんは象潟海岸の写真を見せながら、「自分が疲れた時にいつも行っていたのがにかほの海で、人がいないから落ち着ける場所だっ



[写真提供: 国際教養大学チーム]

たのだ」と振り返った。しかし、海に行った後によく行っていたイタリアンレストランは、その後来客が少なかったためか閉店していた現実も目の当たりにして、人がいない方がいいけど、お店はしまっってしまう……という葛藤や憤りみたいなものを感じていたと言う。

「何を持って地域の活性化と言えるのだろうか?」「私たちはこれからにかほの魅力は伝えたいけど、でも一方では、この魅力を独り占めしたいという矛盾している気持ちをどう表現していくのか、これからも考えていきたい」と最後の言葉を残してくれた2人。大人に言わされてなんかいない、瑞々しいそれらの言葉は、あの素晴らしい鳥海山を表しているかのようには雄大だった。

(追) 発表の際、数多くのかほの写真を見せてくれた2人は、「写真はお見せしましたが、場所についての情報は教えませんので! 独り占めしたいので!」と笑顔で締めくくった。



[発表資料&写真提供: 国際教養大学チーム]

これが
私の本音です!



る大きなヒマラヤ杉で、12月になると盛大なイルミネーションが飾られるという、地元でも有名な場所であったのである。柚木に促されて、ドキドキしながらも一人で店舗に突入し、インタビュアーを敢行。勇気を出してイルミネーションについて聞いてみると、なんと従業員の方は齋藤さんのお父さんの知り合いで、佐藤さんの祖母のこともご存知の方だったのだ。こんな奇跡が起こるのもドリフト旅の醍醐味だ。

車屋を後にして、最終目的地である元滝伏流水へ。鳥海山の湧水として有名な元滝伏流水は、齋藤さんが家族と気分転換によく訪れる場所だったそう。雪に覆われた動物の足跡や清流を観察しながら木漏れ日の中を歩く。ああ、なんと気持ちのいい散歩だろう。「にかほって最高ですよ。この素晴らしさをいろんな人に紹介したいと思ってSNSに載せたりしたことあるんですけど、本当は誰にも教えたくない。本心では独り占めしたいんです」と、森を歩きながら齋藤さんが本音を語ってくれた。高校では「こん

僕これが の「ロマン」だ



新屋高校2年生の工藤紗莉さんは、吹奏楽部の部長を務めるドラマーだ。チームでの参加が条件の本事業に興味を持ったものの、最初に声を掛けた友人には参加を断られてしまう。そこで「この人なら」と満を持して誘ったのが梁田琥太郎くんだった。実は以前、梁田くんが生徒会の事務局長に任命される際、工藤さんは推薦人として演説をしたことがあった。その恩義もあり、梁田くんは本事業への参加を快く承諾。こうして硬い絆を背景に持つ、工藤さんと梁田くんの2人チーム「浪漫知視園夢」が結成された。

梁田くんは、小さい頃からゲームに登場する武器に憧れてきた。スマホで「うんこマン」のコスチュームの写真を見せながら「男のロマンです」と嬉しそうに語ってしまった。自由な奴”だった。最初の集中WSの場でも、用意されていたグミを終始食べ続け、自分が平らげた大量のグミのゴミを満足そうに机いっぱい並べて帰っていった。そんな彼の自由さを、工藤さんはむしろ「面白い」と笑って受け止める軽やかさを持っていた。

梁田琥太郎くん(左)、工藤紗莉さん(右)

そんな工藤さんは、あるとき英語を勉強していて、ふとあることが気になった。学校で流行している「メロい(メロメロになってしまいうくらいかわいい)かわい(い)」という言葉に、対応する英語は存在するのだろうか? 「メロい」という言葉がなくなってしまうたらどうしよう。そんな不安から、彼女は「定着する流行語」と「一発屋で終わる流行語」の違いは何なのだろうか? と、言葉の観察に足を踏み入れていく。とりあえず調べてみよう、新屋高校の生徒60人にアンケートを実施。普段使う流行語や、あまり使わない流行語についての回答を集めた。その結果、「それな」「チャッピー」「〇界限」などはよく使われている一方、「チョベリバ」や「びえん」などはあまり使われなくなっていることが分かった。そこから、定着する言葉には「日常生活で便利」「これまで名前のなかったものに名前を与えている」という特徴があるのではないかと考えに至った。

一方の梁田くんはというと、相変わらず頭の中は「ロマン」の3文字でいっぱい



水道ホース?! メロい?!



いだった。とにかく「ロマン」、何ともあれ「ロマン」なのだ。オンラインWSでは、戦隊モノがなくなってしまうことを憂っていた本荘高校のチーム『ザ☆屋飯キャプテンズ』(P6)の安田くんにDMを送り、その後も互いのロマンを共有するようになる。やがて2人のロマンは「特撮」へと傾き、特撮を撮ろう! という、チームの枠を越えたプロジェクトが始動していった。

それ以降、梁田くんの観察はいつも「特撮」というレンズを通して行われていた。『ザ☆屋飯キャプテンズ』から本荘地区散策会の招待を受けると、湯沢翔北高校のチーム『具がいっぱいのおにぎり』(P40)と共に定食屋や木のおもちゃミュージアムを巡ったあと、皆をDCMへ連れていく。そこで水道ホースの着脱装置の「カチャッ」という部分を見て「これ、変身ベルトのギミックに使える!」と購入。続いて、自分たちで新屋地区散策会を主催しキャプテンズを招くと、佐々木くんの動物園散策に同行しながら、檻のドアの蝶番の仕組みがベルトに



お母さんに「気をつけて帰れ」って言われた



「浪漫を知り、浪漫を視て、夢を図る」



ハアツ、ハアツ、



へやあつ！！！！



←最終報告会で披露された、疑惑の特撮ロマン映像を目撃せよ！ 作品名は「ディフェンダーサー ノーム」

[発表資料&動画提供：浪漫知視図夢]

「ザ☆昼飯キャプテンズ」、『具がいつぱいのおにぎり』、さらには本事業外の生徒にまで伝染し、チームを越えたプロジェクトへと発展していった。地域を動かすのは、いつだってこんな自由な情熱の爆発なのかもしれない。そのシンプルな情熱の「巻き込む力」と「伝わる力」を目の当たりにして、地域とつながるとは案外こんな単純なことなのかもしれない、改めて気づかされた気がした。

—何気ない下浜の風景、不穏な影、そして、突然現れる怪人……。攫われた少女（工藤さん）は絶体絶命。そこに現れる謎のヒーロー（梁田くん）。自作の変身ベルトで、いざ変身!? —
ところが、ここで動画は終了。続きが見たかった会場はどよめいた。しかしステージ上の梁田くんは満足げに「ここまですてきな高いいものを作れて本当に良かった」と納得の表情。確かにそこには「特撮はロマンだ」という彼の偽りのない熱意があり、それは会場にいる人たちにも十分に伝わっていた。「ロマン」という彼の個人的な情熱は、工藤さん、『ザ☆昼飯キャプテンズ』、『具がいつぱいのおにぎり』、さらには本事業外の生徒にまで伝染し、チームを越えたプロジェクトへと発展していった。地域を動かすのは、いつだってこんな自由な情熱の爆発なのかもしれない。そのシンプルな情熱の「巻き込む力」と「伝わる力」を目の当たりにして、地域とつながるとは案外こんな単純なことなのかもしれない、改めて気づかされた気がした。

応用できないかと観察したり、発光するガチャガチャ玩具のギミックが変身の瞬間に使えないかと観察したりした。チーム『具がいつぱいのおにぎり』にももらった「知らない店に入ってみて!」というアドバイスを受けて定食屋や骨董品屋にも入ったが、彼にとってはすべて「変身のヒント」を探す旅だった。
そんなロマン全開の梁田くんに対し、「二人では関わりえない領域がある。私も巻き込まれてみます!」と言って付き合い続けていた工藤さんが、ふと口を開いた。「この坂、私のロマンかも!」それは新屋にある、なんの変哲もない坂道だった。以前から歩いてみたいと思っていたものの、なかなか機会がなかったという通学路途中に存在した坂道。それまで「ロマン」という言葉にあまりピンと来ていなかった工藤さんが、梁田くんや安田くんが巻き込まれていく中で、自分なりの「ロマン」を地域の中に見つけた、彼女にとって大切な瞬間だった。
そして、いよいよ迎えた「特撮」の撮影日。梁田くんが選んだのは下浜小学校



怪人役で協力してくれた佐藤怜くん



工藤さんのロマンの坂



湊谷デザイン事務所での作戦会議

だった。小学校を借りたことがある友人から「外なら勝手に使ってもいい」という情報を聞き出し、『ザ☆昼飯キャプテンズ』の2人、本荘高校から怪人役として佐藤怜君、そして工藤さんと梁田くん、合計5人で撮影に挑んだ。
最終報告会。まず工藤さんが、流行語の調査の中で見つけた、「今までなかったものに名前をつけたもの」という、残る流行語」の特徴から『メロい』はそれに当てはまるから残る!と、彼女の願いを主張した。その熱量は「メロい」という言葉が残る未来そのものも、彼女にとってはまさにロマンなのではないかと感じさせてくれた。さらに「私のロマンは『新屋比内町にある坂』です!」と、梁田くんへの伴走の中で出会った、自分にとって最初のロマンを、軽やかな笑顔で満足そうに語った。
続いて「僕にとって、特撮はロマンなんです」と梁田くんが颯爽と発表を引き継ぐ。短い前置きのあと、『ザ☆昼飯キャプテンズ』と制作した特撮動画が再生された。



集中WS | 2025年10月26日 | 尾去沢鉱山(鹿角市)



集中WS | 2025年10月19日 | 澁谷デザイン事務所(美郷町)



集中WS | 2025年10月26日 | NPO 法人かづのclassy(鹿角市)



集中WS | 2025年10月19日 | やぶ前(美郷町)

向き合うっていう 強さを

さくら国際高等学校



持てるように なりたい

昨年度、秋田県立近代美術館が主催の企画展で、本プロジェクトのアドバイザーである澁谷（澁谷デザイン事務所）と出会い、交流を続けていた「さくら国際高等学校」の三ツ倉康紀くんという一人の学生がいる。彼は、昨年度の最終成果報告会に観覧者として一人で参加し、自分と同世代の高校生・大学生が自らの興味や活動について、人前で堂々と発表する姿に甚く刺激を受けた。そして今年、そんな三ツ倉くんは、同じ学校で「カタルンデス」という対話の場・活動を共にしている加藤里樹くん・鈴木愛くんに声を掛け、今年度のプロジェクトに果敢に挑んでくれた。

通信制の高校に通う彼ら3人は、自己の成長を目指し語り合う「カタルンデス」という場において、「人との関わり方」に対する考え方を中心に、自問自答し続けてくれた。「人の役に立つために地域の大掃除をしたい」、「祖父が日々何気なくやっていることが人のためになっている場面を目にして、『地域のため』に何かすることはどうすることだろうか？

ンバー（サポートしてきた者たち）に対して申し訳ない」という、本プロジェクトにおいては全くもって必要のない気遣いが引っかけた。ここで他人の目や評価を気にして逃げてしまうことは、この先の彼らの世界が広がっていく可能性を萎縮させてしまう気がして、彼らの言葉を見て見ぬふりなどできないMODのメンバーがいた。そして、最終報告会を3日後に控えた3月5日、MODのメンバーが最後に彼らに伝えたのは、「発表などしなくていい。会場に来るだけでも、きつと君たちの糧になるはず」の一言だった。

そして、迎えた3月8日、最終報告会当日。運営チームよりも先に会場に来て、我々のことを待っていてくれた三ツ倉くんの姿があった。「ありがとう、よく来たね」の一言と、抱擁する以外、その場には何も必要なかった。ということ、最終報告会本番、3人を代表して一人でスマホも何も見ず、身体一つで発表の場にも立ってくれた、三ツ倉くんの力強い言葉すべてを、一つの大きな成果としてここに書き残したいと思う。

「皆様方に
申し訳ない……」
なんて
気にしなくていい

右から、鈴木 愛くん
加藤里樹くん
三ツ倉康紀くん



鹿角での集中WSにて

と分からなくなった」、「純粋な気持ちでお節介することって難しい」、「本音で話すことって大事。本音で話していた方が関係性って長続きするかと思う」など、そこには彼ら3人らしい哲学的な世界が広がっていた。

しかし、最終報告会が目前に迫ってきたなかで、彼ら3人からこんなメッセージが届く。「今までを振り返ってみましたが、積極的に活動に取り組めていなかったと思います。その中で報告会も近づいてきて発表内容などをまとめていくタイミングでも、方向性もしっかり決まっておらず、何もできない状態になっています。現状、何も用意出来ていない状態でなんとかで発表をするのは、サポートして頂いた皆様方に申し訳ない、失礼だと思われましたので報告会への参加を辞退させて頂きたいです。申し訳ありません」。

彼らの「中途半端な状態で発表したくない」という気持ちはよく理解できるし、3人が丁寧に悩んだ上での決断であることはよく伝わってきたが、「我々運営メ

「今日なんですけど、3日くらい前まで自分たちのチームは何もしていなくて、何回か澁谷さんとミーティングしていたんですけど、辞退したいって話をしていたんですけど、でも今日来たら来るだけでも来てみて、夢人（昨年度の本プロジェクトに参加していた三ツ倉くんの友人）にも支えてもらって、自分なりに半年・一年どういうことがあったのか、それを経てどう思っているかということ、今日は話しながら、自分でも整理できたらと思います。」

まず、本当は自分たちのチームは3人のチームなんですけど、なぜこの3人が集まったかというところ、すごく話すのが好きな人間の集まりで、僕が引く張ってきただってところがあつて、3人で話していると自分は落ち着く感じがあつて。だから3人で話すことが多くて、そこでチームができて。なぜここに参加したかというところ、以前に澁谷さんと縁があつて、このプロジェクトを紹介していたので参加しました。最初の頃は話すこと

が良かったんですけど、3日くらい前まで自分たちのチームは何もしていなくて、何回か澁谷さんとミーティングしていたんですけど、でも今日来たら来るだけでも来てみて、夢人（昨年度の本プロジェクトに参加していた三ツ倉くんの友人）にも支えてもらって、自分なりに半年・一年どういうことがあったのか、それを経てどう思っているかということ、今日は話しながら、自分でも整理できたらと思います。」

自分のすべてを曝け出した三ツ倉くんの発表に対して、会場で観覧していた仲間たちからはたくさんの共感の音が聞かれた。7年間続いた本プロジェクトにおいて、彼ほど、本当の意味での「MOD（もっとお尻を出す）」することができた人はいなかったかもしれない。ほんの5〜7分の時間だったが、あの時間は彼にとつてどんなに怖く、勇気のいる場であつたのだろうか。この7年間、彼、彼らのような学生のためにも「若者と地域をつなぐプロジェクト」という場が在り続けてきたことの意味を今一度噛み締め、一人である場に立ってくれた三ツ倉くんに感謝したい。

が好きだつてことがあつて、色々な活動をしている方たちとお話をしたんですけど、その中で話を聞きながら自分について考える、自分自身を見ることができなくなって思つて、そういうのを何回か近づいてくるにしたがつて、「どうする？」つてなつた時に、すごいなーで流れちゃつてきた感じがあつたんです。というのも、自分が他の2人によくない気の遣い方をしちゃつてたかなつて思つて、「発表どうする？」つて聞いた時に、みんな「ん〜」つて困つて空白になつちやう時間があつて、それがすごいムズムズするというか……、それで「じゃあ、なんか今日はとりあえずいいか……」みたいなことを繰り返してしまつていたんです。

分の中ですごく自分の心に刺さつて、今まで大きな決断する時も周りからの目だつたりを気にし過ぎて、ちゃんと本音みたいなところを出さなかつたり、自分の気持ちに正直じゃなかつたりとか、そういうことをして、すごいいろんな決断だつたり、人と向き合うということなどから逃げてきたかなつていうふうな思つていて。今回の活動を通して、そういうことをすごい体感したというか、感じました。

今後これから、もっと話せたらいいかなつて思ふんですけど、正直これからじゃあ変わるかっていうと、そんなこともないかなつて思つて……。やっぱり、すごい自分を出すつていうのは怖いし、自分の中にあつて。これからも多分いっぱいそういうことはあると思うんですけど、多分この先もできないんじゃないかなつて気がして……。でも、それでも本当に、今日、澁谷さんだったり、夢人だったり、すごいフォローしてもらつて、支えてもらつて、ここに来てしゃべ



地域地域
地域って
してる！

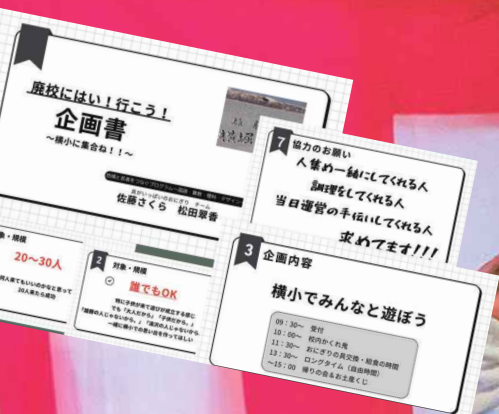
場所、人、
思いやり、
全部が！
地域なんだ！

具がいっぱいの
おにぎり

湯沢翔北高校3年生の佐藤さくらさんと松田翠香さんは、昨年度の本プロジェクトにも参加してくれていたメンバー。昨年の活動では、レシートを集めて地域の消費の特徴を探ったり、キーホルダーなどが沢山ついた同級生のバッグを観察したりと、身近なものから地域を読み解くユニークなサーチを行い、印象に残る発表をしてくれた。しかし、その活動の中で2人が本当にやりたかったことがあった。それは、自分たちの母校であり、すでに廃校となっている旧横堀小学校を舞台に何か活動をする事。そんな思いはありながらも、昨年度の時点で実現できなかったことが2人の中で心残りとなり、「今度こそ母校で何かやりたい！」という想いをもって、今年度もこのプログラムに応募してくれた。しかし、受験や就職活動を控えた3年生にとって、時間を確保することは容易なことではなく、昨年に続いて応募するかどうか最も後まで悩んだ末に、「やっぱりやりたい」という気持ちで参加してくれたことが、とにかくうれしかった。

そうして動き出したチーム『具がいっぱいのおにぎり』の活動は、実際思うように進まず、進路に向き合う時間が続き、12月頃まではほとんど活動ができない期間が続いた。2人にとっては自分の将来を考えることで忙しい、大切な時期だったことは間違いない。しかし、それでも地域のイベントや若者の集まりに顔を出しながら、少しずつでも着実に地域とのつながりを探していく彼女たちの姿勢はとても印象的だった。

そして、彼女たちの活動が本格始動する転機となったのが、湯沢で開催されていた「若者ミーティング」に参加したことだった。そこで地域の建設会社である菅組の社長である菅洋介さんと出会い、旧横堀小学校のことを話してみると、「実は自分たちもあの場所で何か企画を考えている」という菅社長の話を聞くことができた2人！そこから、2人はイベントの場に顔を出しながら、菅社長をはじめとした地域の方々との関係を育みつつ、自分たちが旧横堀小学校でイベントをやりたい気持ちを少しずつ大人たちに



【発表資料提供：具がいっぱいのおにぎり】

伝えていった。さらに、本荘高校のチーム『ザ☆昼飯キャプテンズ』(P6)との交流で、廃校を活用した施設である「鳥海山木のおもちゃ館」を見学し、そこに子どもたちが集まって遊んでいる様子を目にした2人。その光景を見て、「自分たちの母校にも、もう一度子どもたちが集まる景色をつくりたい」という思いが強まっていった。

そして2026年1月、横堀で開催されたモルック大会の手伝いをきっかけに、「今月中に企画書を出してみないか」という話が生まれ、ここから2人の怒涛の1か月が始まる。1月29日に企画書を提出し、そこから打ち合わせや準備が次々に進んでいき、地域のサロンとの打ち合わせ、地域の方々への相談、ポスター制作、小中学校や学童へのチラシ配布など、限られた時間の中で一つひとつ準備を進めていった2人。地域の方々にも協力をお願いし、地域のおばあちゃんたちには食事づくりを担ってもらい、また、母校の先生や教育委員会にも相談しながら、イベントの実現に向けて奔走して

いった。

そして、いよいよ迎えた2026年2月28日、旧横堀小学校での2人が企画したイベント「廃校へ！ はい！ いこう！ 横小こうぜい！」が開催される。当日は、ミッシヨンのかくれんぼや鬼ごっこ、そして「みんなでおにぎりタイム」など、子どもたちが楽しめる企画を用意。地域の人たちが準備してくれた具だくさんのおにぎりを囲みながら、子どもも大人も地域の方々みんなで一緒に過ごす時間が生まれた。

当日の参加者は予想を大幅に超える60名以上。保護者や地域の方々も含めると、100名を超える人たちが旧横堀小学校に集まり、かつて子どもたちが通っていた校舎に、再び子どもたちの声が響く一日が実現した。

活動を終えた2人は、最終報告会の場で、「地域の懐の広さ」を強く感じたと言葉にしてくれた。地域の人たちは、自分たちの「こんなことをやってみよう」という思いを受け止め、支えてくれた。場所だけでなく、人や思いやりも含めて

今回の活動は、母校にもう一度子どもたちが集まる風景をつくるという形で実を結んだ。地域の人たちと一緒に作り上げたあの一日は、これまでの若者のチャレンジを受け止め、支えてくれた「地域の懐の広さ」があったからこそ実現できたもの。まさに彼女たちの言葉にあった「地域って、地域してるな！」をたっぷりと感じた発表だった。チーム「具がいっぱいのおにぎり」の活動を通じて、まさに「若者が地域とつながる」ということの本当の風景を見ることができた気がした。



↑たくさん地域の方々か
具たくさんのおにぎり作りを手伝ってくれた

↑2人のチャレンジを
陰で支え応援してくれた
菅洋介さん

校内かくれ鬼ごっこの様子→

地域が「これしたい」「あれしたい」を受け止める場所であってほしい



現在は廃校になっている
旧横堀小学校の校舎と校章

「地域」なのだということを、2人は自分たちが必死に動き回って実現したあの一日を通じて実感してくれた。そして、今回のイベント実現に向け、陰で多大なご尽力をいただいた菅洋介さんはそんな2人に対して、「私自身が周りの先輩たちに何かやりたいことがあるんだしたら、どんどん言ってこいって言われ、いろんなこと自由にやらせてもらってきた経験がありました。そして、その先輩たちに、お前たちが大人になって、何か地域に対してできるようになったら、後輩の力になつてやれとの言葉をもらっていたので、今回に繋がっていったんだと思います。今後、もし2人の周りにまたそんな先輩が現れたら、どんどん手伝ってほしいし、これから進学で遠くに行っても繋がりを保持してほしいと思います」という温かいメッセージを、最終報告会の会場でくださった。

「地域ってなんだろう？」その問いに対して、迷わず2人はこう最後に言葉にした。「場所、人、思いやり。全部が地域なのだ」と。昨年の心残りから始まっ



集中WS | 2025年10月19日 | やふ前 (美郷町)



集中WS | 2025.8.12 | エリアなかいち (秋田市)



集中WS | 2025年10月26日 | 尾去沢鉱山 (鹿角市)



集中WS | 2025年10月19日 | 澁谷デザイン事務所 (美郷町)



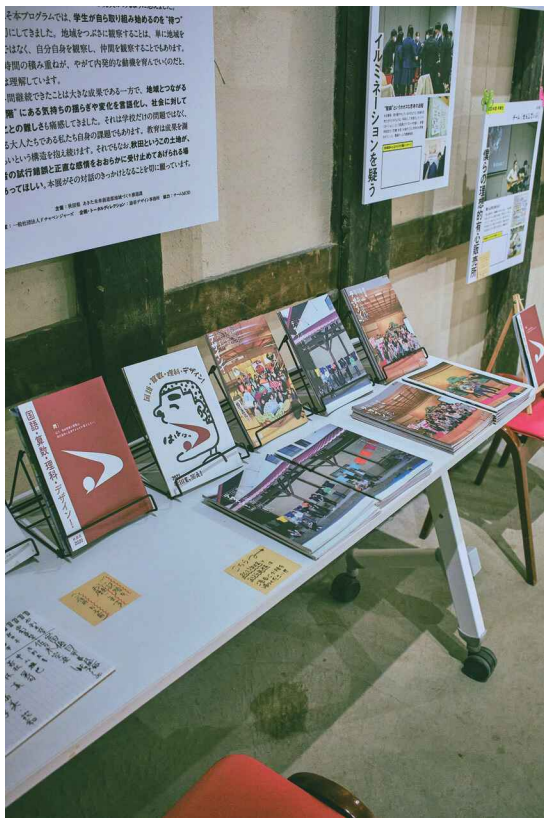
「国語・算数・理科・デザイン!」総まとめ展覧会

「観察する」ことをきっかけに、デザインの視点から地域を意識し、地域とつながろうとする感情に向き合い続けてきた本プロジェクト事業。県内の高校生、大学生のチームそれぞれが「地域とつながるってどういうことだろう?」と悩み、自分自身の正直な感情が動き出すまでじっと耐え、待ち続けました。本事業が最終年度を迎える今年、最終報告会と並んで、この7年間を振り返る「総まとめ展覧会」を企画・開催し、これまで参加してくれた学生たちの「葛藤の過程」という「成果」を一つ一つ大切に、秋田市の「旧松倉家住宅」の米蔵に展示しました。

本プロジェクトにおいて、この7年間で私たちが学んだ大きなことの一つは、高校生たちを取り巻く現実を、地域と若者をつなぐ大人たちが丁寧に見つめる必要があるということでした。想像している以上に学生は忙しく、学校から地域へ関わることへの要請も年々強まっています。そのなかで彼らは、あらかじめ用意された枠組みの中で動くことを期待され、無意識のうちにそれを自然なものとして内面化してしまっている現実があるように思えました。

だからこそ本プログラムでは、対外的に分かりやすく、正解然としたアクションだけに走らせることなく、学生が自ら主体的に取り組み始めることを待つ(待つてあげる)姿勢を大切にしてきました。地域をつぶさに観察することは、単に地域を知ることではなく、そもそも自分自身を観察・理解し、仲間との関係性を観察することでもあります。そうした時間の積み重ねが、やがて内発的な動機を育んでいく土台になっていくのだと、私たちは理解し、信じています。

7年間継続できたことは大きな成果である一方で、若者が地域とつながる「前段階」にある気持ちの揺らぎや変化を、社会に対して言語化し示すことの難しさも痛感してきました。それは学校だけの問題ではなく、関わる大人たちである私たち自身の課題でもありません。教育は成果を測りづらいという構造を抱え続けます。それでもなお、秋田というこの土地が、若者の試行錯誤と正直な感情をおおらかに受け止めてあげられる場であってほしい。本プロジェクトが向き合い続けた、この7年間という研鑽の時間・場が、その対話のきっかけであり続けることを願っています。





令和7年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業

国語・算数・理科・デザイン! 最終成果BOOK

《編集》
一般社団法人ドチャベンジャーズ

《編集・アートディレクション・デザイン》
澁谷 和之(澁谷デザイン事務所)

《写真》
佐藤陽亮(てるとる)

鄭 伽椰(小宇宙感光)

《参加チーム(全8チーム | 発表順)》

- ・ザ☆星飯キャプテンズ
- ・鹿角高校
- ・ZOD
- ・湯沢翔北1年生チーム
- ・国際教養大学
- ・浪漫知視図夢
- ・さくら国際高等学校
- ・具がいっぱいのおにぎり

《運営・編集協力》

チームMOD

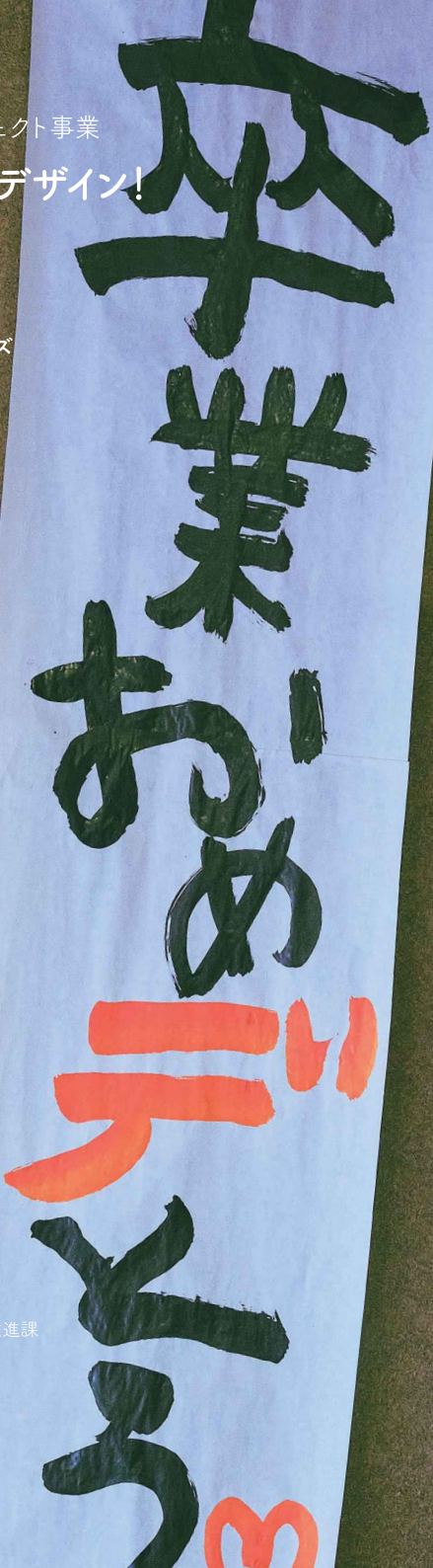
黒崎 平(安養寺:好問風のある地域)
松嶋 駿(スタジオSSB)
柚木 恵介(秋田公立美術大学 准教授)
澁谷 和之(澁谷デザイン事務所)
柳澤 龍(一般社団法人ドチャベンジャーズ)
鄭 伽椰(小宇宙感光)
佐藤陽亮(てるとる)

チームCOD

門脇結那
鎌田ひかる
佐々木萌果

主催
秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課
運営
一般社団法人ドチャベンジャーズ
企画・トータルディレクション
澁谷デザイン事務所

2026年3月発行



デザインは、事あるごとに「課題解決をするためのもの」と意識される。確かにそのような側面はもっているが、実際に課題が完璧に解決するかという点とそんなことはほとんど無いように感じる。確かに一時的に解決した気になることはあるが、しばらくするとまた同じような問題が発生するか、もしくは別の新たな問題が起るかのようでは、デザインはなんのためにあるのかという点、**「問題を意識し続けるためのもの」**と捉えられないのではなか。足元の段差につまずいて転ばないよう、なだらかに床を埋め尽くしてしまうのではなく、「ここに段差があるよ」ということを促し続ける。時につまずくことはあるとしても、**促す姿勢がデザインの本質ではないか**と思う。人は一度問題が解決してしまおうと、問題があったことと自分を忘れてしまう。それこそが我々人類の一番の問題なのではないだろうか。だからこそ、ある程度手間がかかり時間を要するとしても、失敗を享受させながら、「見守り続ける」という**デザインが教育には必要だ**と言えるだろう。

このプロジェクトは10年計画でスタートしたという。県事業としては7年目の今年度で一旦終了となるのだが、これでデザインが終了ということはないだろう。それぞれが持つ問題を促し続けるのがデザインだとしたら、全ての人類がデザインの態度を持ちながら生活をした方がより良い未来を創造できるのではないだろうか。だからこそ、改めて、今から10年後の秋田に問う。
クマはまだ街中に出ますか？ 人口は減っていますか？ 秋田のことを愛する若者はたくさんいますか？

秋田公立美術大学 准教授
柚木恵介

本事業が立ち上がって7年。自分が「デザイナー」としてこの事業に関わりはじめたのは、コロナが猛威を振るいはじめた2020年、事業2年目からのことだった。

あれから6年間、自分が「デザイナー」として本事業で一番大事にしてきたことは、参加してくれる学生たちの声に、ただただ「傾聴」するという**姿勢**だけだった。そこでは、デザイナーとして画期的なアイデアを指南したりするような伴走は一切なし。人に話を聞いてもらい、その対話の中で自ら自分の本心に気づき、整理し、行動してしまいう状況を、**ただただ根気強く「待つ姿勢」**こそが本事業の現場で求められる「デザイナー」だったと、この6年間という時間を経て感じ、学んだ。

そんな「聴いてもらえる場」としての「国語・算数・理科・デザイン」という時間の存在は、この事業を卒業し、その先々(進学先・就職先)で健全に悩める人材たちの「**駆け込み寺**」的な存在としても機能し始めている。今回7年間の総まとめとなった展覧会および最終報告会の場でも、過去の卒業生たちが、今の自分に悩み、苦しんでいることを正直に吐露してくれた。地域や教育の現場において、当然確保されているべきことのように思われる「聴いてもらえる場・関係性」構築の難しさ。それは、若者が地域とつながる「ために、地域(我々、大人たち)が自覚し、耕し直さなければならぬ」、これからのデザインの課題とも言えるだろう。県事業として一区切りを迎えた今、「国語・算数・理科・デザイン」という場の必要性を益々感じ、いよいよ地域へのお節介なデザインを始めようかと思いはじめた、前のめり気味な卒業の季節である。

澁谷デザイン事務所
澁谷和之

地域社会を担うリーダー育成を目指す「若者と地域をつなぐプロジェクト事業」に取り組み、7年が経った。毎年30人ほどの高校生・大学生と半年間、プロジェクトを通して学び合ってきた。高齢化率が高い秋田では、彼らは約2万人、県内人口の約2%にとどまる。彼らを取り巻く日常は、学校行事や部活動、進学・就職への準備で多忙であり、大学生も学業やインターンシップ、就職活動など、将来に備えて日々を過ごしている。そうした実情を、彼らとの交流の中で何度も思い知らされた。

大人側が期待する地域の担い手育成とは異なり、高校生・大学生が求めていたのは、**未来を過度に意識せず、自由に地域や社会と関わり、成果や成果にとらわれず自分らしくいられる居場所**だった。それに対し、運営を担った私たちは、地域に暮らす一人の市民として、若者と対等に関わり、**「学校で見せる姿とは異なる一人の若者」として過ごせる時間を共にすることができたのではないか**と思う。

この事業を通して、多くの魅力的な地域と出会った。人間関係が密で、小さな地域だからこそ互いに応援し合い、若者のために時間を惜しまず関わる大人たちがいる。その姿に触れた高校生たちは、「いつか自分も、若い世代を応援する側になりたい」と語っていた。7年間で関わった212人の若者が、次の世代へとその想いを手渡していく。多世代がつながり、互いに応援し合う関係性が続いていく土壌が、この秋田には確かにある。この土壌がこれからも続いていくように、地域で暮らしていきたいと思う。

一般社団法人ドチャベンジャーズ
柳澤龍